

## コロナ禍における母性看護専門看護師の活動

長坂桂子、角川志穂、津田充子、中井愛、深澤友子、  
前田一枝、八巻和子、松原まなみ



コロナ禍では、妊産婦を取り巻く環境は変化し、精神的不調や虐待などのリスクが増大しました。母性看護 CNS も母子の感染防止対策等、対応を必要とする課題が顕在化しました。

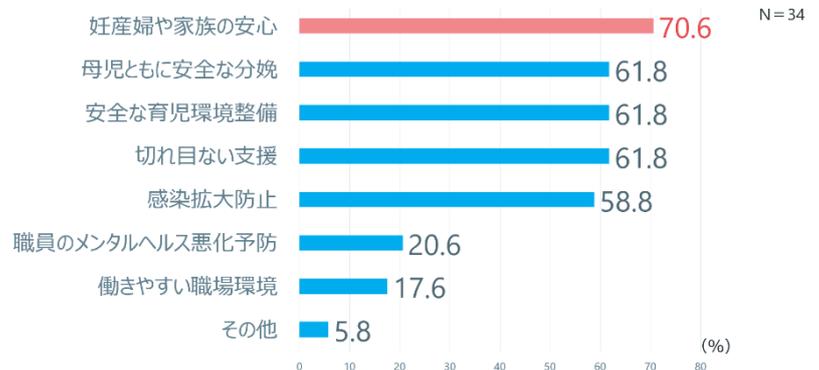
母性看護専門看護師（以下、母性看護 CNS）は、複雑で解決が難しい課題を抱えた母子や家族にケアを提供し、多職種連携チームの中で、チームが柔軟に変化に対応し、安全にケアを行えるような仕組みづくりを行う役割を担っています。

先が見えない不安定なコロナ禍の状況の中で、母性看護領域ではどのような高度看護実践が行われていたのか、記録に残すことが重要と考え、日本母性看護学会では『コロナ禍における母性看護 CNS の活動内容』を記述することを目的に、2022年2月に、母性看護 CNS を対象とした無記名 Web 調査を行いました。

全国の母性看護 CNS 登録者89名中、86名に調査票を送付し、50名より回答を得ました（回収率58.1%）。

新型コロナウイルス感染症対策の活動内訳は、多い順に「最新情報や良実践の情報収集と発信」・「罹患又は濃厚接触者となった母児とその家族への対応」が共に 26名(76.5%)、「部署の新型コロナウイルス感染症対策マニュアルの作成と周知」21名(61.8%)でした。また、協働した職種は、医師32名(94.1%)、次いで助産師31名(91.2%)、看護師26名(76.5%)、自施設の専門看護師・認定看護師16名(47.1%)の他、ソーシャルワーカーや事務・医事会計担当者、情報システム担当など、多職種であり、自治体の保健師11名(32.4%)をはじめ、他施設の専門看護師・認定看護師、児童相談所など、組織を超えても協働し、コロナ禍に対応する活動を行っていました。

活動の効果として、実感を得ていることは、「妊産婦や家族の安心」が24名(70.6%)で最も多く、「母児ともに安全な分娩」・「安全な育児環境の整備」・「切れ目ない支援」がそれぞれ 21名(61.8%)、「感染拡大防止」20名(58.8%)でした。



母性看護 CNS は母子や家族への直接的な実践だけではなく、母児やスタッフの院内感染者数、感染病棟からのコンサルテーションや多職種カンファレンスの実施件数、オンライン出産前教室受講率、産後うつ罹患率といった指標を用いて実践の分析・可視化を行っていました。

この調査から、母性看護 CNS は、コロナ禍において、情報収集と発信、マニュアル作りなど、医療チームで良い実践を行うことを主眼に置いた仕組みづくりを目的とした活動を行っていたことが推察されました。

母性看護 CNS は多職種における調整役を担うと共に、いち早くチームにデータを提供し、チームが OODA サイクルをまわすことで、コロナ禍での妊産婦の安心・安全・院内感染防止に貢献していました。

※本報告は、第26回日本看護管理学会で発表した内容を加筆・修正したものです。

調査結果の詳細は日本母性看護学会誌（2024）に掲載を予定しています。